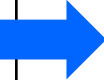


①アセスメント結果をふまえた改善の取り組み

	2024年度・2025年度のアセスメントを通じて把握された課題・要検討事項 	実施した改善の取り組み
英米語学科	学年が上がるにつれTOEFLスコアの伸びは見られるものの、 <u>3～4年次で500点以上に到達している学生の割合が少ない</u> 。これは3年次に英語専門講読を履修できないことを意味する。	・英語力向上のためにTOEFLやTOEICの受検が重要であることについて、2月の入学前教育オリエンテーション、新年度ガイダンスおよび基礎ゼミ担当教員を通じての周知をより一層徹底した。 ・C基準・B基準未達成者のIntensive Academic Readingの履修を奨励するため、新年度ガイダンスにおいてその目的と特性の周知を強化した。
中国語専攻	1年生で運用しているMULCカード(授業で習ったことをMULCで確認、活用してスタンプを押す)以外にも、 <u>MULCに足を向けられる学習イベントや、授業外で実際に中国語を用いる交流イベントなどを検討する</u> 。	・5月初めにラパスで専攻としての新入生歓迎会を行い、中国、台湾からの交換留学生12名にも参加してもらった。 ・今後は卒業生を招いて、社会に出てからの中国語使用や、在学中の留学、就職活動の経験などを話してもらいイベントを検討する。
韓国語専攻	英語の必修科目が増加し、暗記中心の試験となる語学科目が卒業単位の半分を占める一方、 <u>批判的に考える能力や文章表現の能力が「減った」と答える学生が一定数いることから、暗記に傾倒しすぎない工夫が今後検討されていくべき</u> 。	一部の講義科目では引き続きレポートを義務づけており、参加学生にもレポートを書くことの必要性を説明している。
東南アジア3言語専攻	<u>ML英語のカリキュラム運営において、プレイスメントの方法は最重要事項であると考えているが、入試の多様化とともに新入生のクラス分けに苦労しており、学生からも時々不満の声(なぜ自分はこのクラスなのかなど)が聴かれる。</u> <u>GTEC Academicを導入することにより、統一の尺度でのクラス分けができ公平性と透明性の確保が期待できるため、検討を進め大学に提案したい。</u> ML英語のカリキュラム及び授業内容に拠る学習成果の評価手法としても適切である。	ML英語のプレイスメント方法の問題とGTEC Academicの導入の関係について、7/9に開催された第3回英語教育運営部会にて課題提起した。
スペイン語専攻	学生の特性に応じた検定試験の選択と戦略を従来以上に図る	今年度より、3・4年次の「スペイン語応用」でスペイン語のレベル別にクラス分けを行い、検定試験に対応する授業を行っている。

①アセスメント結果をふまえた改善の取り組み

	2024年度・2025年度のアセスメントを通じて把握された課題・要検討事項	実施した改善の取り組み
ブラジル・ポルトガル語専攻	専攻言語の習得への意欲増進およびその運用能力を上げること	・京都外国語大学での受験となるポルトガル語検定試験の受験促進のため、教務部と協議のうえ助成金制度を設け、2025年度より運用が開始された。今後はこの制度の周知とともに、検定受験の呼びかけを行っていく。 ・学内で到達度テストを作成し2025年1月に試行した。そこで洗い出された試験の難易度や時間配分の課題を改善するため、今年度末に作題しなおしたもので再度実施する。 ・京都外国語大学で毎年開催されている全国学生ポルトガル語弁論大会への出場を促進し、大学参加5枠を最大利用することができた。出場者については、語学専任の先生方を中心に集中的に練習を実施し、好成績を収めることができた。この取り組みにより、ポルトガル語圏への留学意欲が高まった。
国際コミュニケーション専攻	思考力や判断力に関して変化を感じないと評価する学生が他の能力に比べて多かったため、これらを向上できるよう、関連科目の内容を定期的に見直したい。また、これらをより良く身につけるために、学生への学習支援の強化を検討したい。	・学科長が現場の状況を把握できるよう、関連科目の担当教員との面談を実施したり、新規教員採用の際、副学科長をはじめ関連科目の担当教員と相談を行ったりすることとした。 ・2025年6月より「HarmonIC」（SALC内設置、毎週火曜日昼休み開放中）というIC学科の交流エリアを立ち上げた。教員と学生の意見交換の場としても活用したく、運営方法を模索しながら学生への学習支援をしたい。
	英語科目「English for International Communication Ⅲ」は内容言語統合型学習にあたり、DP3および4との関連性が高いことから、専門分野や学科の知識・異文化の人々に関する知識・グローバルな問題の理解・分析力や問題解決能力・批判的に考える能力・コミュニケーションの能力の向上にも寄与していることが期待される。 ただ、二桁のセクション数で運営されており、それぞれの内容と担当者の重点注力する項目が多様であるため、学修成果を項目ごとに客観的に評価できるようにするためには、各カリキュラムの統一した精査基準を設けることが必要である。	・これまでは主にELI教員が担当していたが、学科の英語コーディネーターも1コマ担当することにより全体像を把握しやすくなった。 ・ELIとSALCの担当者との定期的な意見交換の場を設けたい。今学期は少し始めたが、これからはもっと積極的に行いたい。

①アセスメント結果をふまえた改善の取り組み

	2024年度・2025年度のアセスメントを通じて把握された課題・要検討事項	実施した改善の取り組み
国際ビジネスキャリア専攻	取得単位数が極端に少ない学生について個別に状況を把握し、必要によって個別指導を行うことを検討する。	教務委員による個別指導を実施中である。
	「分析力や問題解決能力」に関して、1・2年生と3・4年生で成長の実感に違いがなかった。3・4年生が産業や企業を分析し、ビジネス課題を解決する能力を養う機会を増やすため、国際ビジネス研究コースの休講科目の開講や科目数増加に取り組むたい。	・組織コミュニケーション論Ⅰ・Ⅱを開講している。 ・休講科目であった国際ビジネス・コミュニケーション論Ⅰ・Ⅱを2026年度より開講予定である。 ・2027年度からの国際ビジネス研究コースの科目群の見直しを行うべく、本年度後期からIBC専攻専任教員で検討会を行う予定である。
グローバル・リベラルアーツ学科	TOEFLの点数の底上げは、SUNY留学の際の基準点にもなっていることから1～2年次の全学部的な課題となっており、そのための効果的な手法・アプローチ、学習モチベーションの維持など、引き続き持続的かつ有効な取り組みの検討を行う。	2025年度後期の1年次必修科目である「GLA入門Ⅱ」授業内にて「先輩と語ろう」という企画を行い、SUNY留学から帰国・就活を終えた4年生と下級学年の学生との交流の機会を作った。これによって1年生に、TOEFLスコアを早めに取得することがいかに重要かなどについての危機感・意識を芽生えさせることができ、学びの意欲向上という意味で一定の効果があった。

【その他、主な改善の取り組みや今後の予定】

英米語学科	学科の研究コースごとに、どのDPがどの科目のintended learning outcomes（目標としての学修成果）と対応しているのかを整理する。
国際コミュニケーション専攻	3・4年次の英語科目「English for International Communication Ⅲ」において、学生が国際コミュニケーション学科のディプロマ・ポリシーで掲げている知識・能力を内容言語統合型学習を通じて向上できるよう、それぞれのテーマとシラバスを精査し関連性の高いコースを開講した。 今後さらなる言語活動の充実に向けて、1クラスあたりの履修者数と時間割を最適化する必要があり、セクション数を調整することで対応していく。